

南條範夫

元禄松平記

前編



條範大

乘來記

前編



日本放送出版協会

検印廃止

---

元禄太平記 前編

昭和五十年一月十日 第一刷

著者 南 條 範 夫

発行者 浅 沼 博

印刷 凸版印刷株式会社

製本 石津製本株式会社

発行所 日本放送出版協会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

# 目 次

限りなき前進

七

深夜の使者

二

昼行灯

四

將軍お成り

四

生類憐みの令

六

老公狂乱

七

叔父と甥

九

明暗色模様

一四

塩田騒動

一七

江戸再遊

二二

元禄爛熟

二六

泰平の江戸

二六

|           |     |
|-----------|-----|
| 柳沢殿の内意    | 一七  |
| ゆきちがい     | 一七  |
| 大廊下での出来事  | 二〇  |
| 風さそう花     | 二六  |
| 春の嵐       | 三九  |
| 会議は躍る     | 四四  |
| 光と影       | 五九  |
| 君辱かしめらるれば | 七三  |
| 最後の会議     | 八七  |
| 開城前後      | 一〇一 |
| 去って行く人々   | 一四  |
| 駒込六義園     | 三七  |

装  
幀

村  
上

豊

# 元禄太平記

## 前編



## 限りなき前進

### 一

その日、巳の刻（午前十時）御座の間上段に出御した將軍綱吉はひどく機嫌がよかった。

召しに応じて、下段に並んだ月番の老中の戸田越前守忠昌以下、御側御用人たちは、

——また、上様は何か人の意表をつくような人事を考えておられる。

と感じている。

綱吉は、重要な人事について、老中、若年寄などに一言も相談しないで独断専行することが多い。

この峻烈な將軍は、完璧な独裁権を握るには、最高人事権を独占し、それを充分に活用するのが最

も有効であると言うことを、本能的に嗅ぎとっているらしい。

どんな重要な地位でも、將軍の一言で任免が決定されると言うことであれば、誰もが戦々恐々として將軍の鼻息を覗うに違いないのである。

みんな、御側衆南部遠江守直政と、御小納戸役柳沢出羽守保明（美濃守吉保と改めたのは元禄十四年十一月）とが、召出しの命令を受けていることは知っていた。

——恐らく遠江守を御側御用人に任命されるのであろう。

これはほぼ推察が出来た。だが、柳沢出羽守については、

——御小納戸頭取か、或いはひょっとして特例をもって御側衆にでも拔擢なされるお考えか。御側衆なら、また五千石へ御加増と言うことになる。つい一昨年千石の御加禄があったばかりだが。

と、推量をめぐらしみるばかりだ。

「南部遠江並びに柳沢出羽、お召しにより参上仕りました」

席に列つらなっていた御側衆大久保佐渡守忠方が言上した。

直政と保明とが、御座の間下段の敷居近くに平伏する。保明の方が、やや後方に退さかっていた。

直政は陸奥八戸の城主で二万石を領する御側衆である。保明は二千三十石の御小納戸役に過ぎないのだから、これは当然である。

綱吉は、平伏している二人のうち、保明の方に視線を据つえていた。

——保明め、愕おどろくだらうな。

その愕く表情を予想すると愉たのしい。保明に対してはずっと以前から、時々こうしたいはずらをしてみる癖がある。

いつも身近く奉仕し、親しく口をきいている保明が、改まった様子で畏かしこまって平伏しているのも、ちょっと操さくったような気がする。

「出羽！」

綱吉が、保明に向かって呼びかけた。

列座の者が、すべて、

——あッ

と、表情を動かした。南部直政の表情が最も大きく動いた。

異例のことなのだ。

官職の異なるものを並べておいて言葉をかける時は、上位の者を先にする——これが常例である。その常例を無視されたのは直政にとっては、思いもよらぬ屈辱である。さッと表情をこわばらせ、眼中に怒りを迸ほととらせたのは当然であった。

しかし、綱吉には特別な意図があった訳ではない。ただ、保明の愕く顔を早く見たかっただけである。直政のことなど、殆ど、眼中になかった。

「出羽、近う寄れ」

綱吉が言った。

保明は、ちらっと直政の方をみて、躊躇ちゅうちよした。だが、綱吉の言葉は絶対的である。

拝礼して、上段の間近くに進んだ。

「出羽、その方に側用人そばようじんの役を申し付ける。これより、伊賀や若狭と同列に勤めるがよい。なお、役目柄、一万石を加えて遣わすことにしよう」

列座の者の愕きは、頂点に達した。

御側御用人は、老中の次、若年寄の上に位する重職である。通例は御側衆又は若年寄の中から特に選任されている。現在の御側御用人は、

下総関宿城主牧野備後守成貞しげさだ五万三千石、

武蔵岩槻城主松平伊賀守忠周ただちか四万八千石、

武蔵喜多見城主喜多見若狭守重政二万石、

の三名である。牧野は五十五歳、他の三名いずれも四十歳を越えていた。

保明は三十一歳、小納戸役の現職から考えれば、小納戸頭取への昇進ならば順当、御側衆への拔擢ならば二階級特進である。

それが更にその上位の御側用人へと、三階級特進を申し渡されたのだ。そして同時に、二千三十石の旗本から、一万二千三十石の大名となる。

保明は、頭を上げた。

綱吉と、瞳ひとみが会った。

——どうだ、保明！

綱吉の瞳ひとみの中が、笑っていた。

——上様、勿体ないことながら、また、私めの胆をお潰しになりました。昨日、奥儒者おくじゆしゃ御進講の節、お側に侍はべっておりましたのに、何事も仰せられず。

綱吉の言葉を聴いた時、保明は、本心から愕おどろいた。だが、すぐに、愕おどろきよりも、満足の感情に移っていた。どんな殊遇を受けても、それを当然と受けとるような甘えが、この三十男の心の隅にひそんでいるらしい。

保明は、しかし、綱吉と瞳ひとみを会わせた時、最初に感じた愕おどろきの色を、殊更に誇張して瞳の中に現していた。それが綱吉の心を悦よろこばすことを充分に知っているからである。

綱吉の御前に出た時、頭をきッと上げて、その顔をじっと見詰めることが出来る者は、殆どいない。それほどこの専制君主は怖れられてい

た。

仙台中將伊達綱村でさえも、

——先代の上様に拝謁した時は、仰いで尊顔を拝したが、当代の御前ではおのずから俯伏してしまってお顔を見ることが出来ぬ。

と告白している。

その綱吉と瞳を会わせて、この保明ほど自由に喜怒哀楽の感情をはっきりと表示出来る者はほかにいないだろう。

「重ねがさねの御恩寵、御礼の言葉もござりませぬ。一意、御奉公申し上げます」

保明は頭を畳につけた。

綱吉は、手ずから、青江次吉の名刀を与える。

保明が元の座に戻ると、綱吉は、

「遠江——」

と、南部直政に声をかけ、御側御用人の役を申し付けた。

直政は硬直した表情を続けていた。

御側御用人への昇進は悦ばしいことであつたに

違いないが、綱吉の保明に対する態度は、自分に対する侮蔑としか思われなかつたからである。

保明と直政とは、御用部屋に赴いて、老中の面前で、誓詞を書き、血判をした。

この間に、奥坊主たちが、殿中を走り廻って、この新しい愕くべき情報を、各部屋々に注進して廻っていた。

——柳沢出羽守が御側御用人に！

その情報を耳にしたすべての者が、一瞬、信じられないように瞳を大きく開き、

——そうか、到頭、と、呻った。

中には、いまいまし氣に、そっと、口の中で、  
呟く者もいた。

——あの、ホタル小納戸めが。

ホタルは尻で光る。男色のお蔭で重用される者を、ホタル小姓、ホタル侍などと言った。

御前を退いてきた保明は、顔を会わす多くの人の会釈が、昨日までとは全く違って、鄭重を極

めるのに気がつき、心の中で、くすりと微笑笑した。

## 二

下城してから老中の邸に赴いて挨拶を済ませ、暗くなつてから西の丸下の屋敷に戻った保明は、妻定子以下三十余名の家族使用人らに、悦びの声を以て迎えられた。

玄関から表座敷にかけて、廊下を埋めるほどに、祝いの品が届いている。

——早いものだ。

と愕いたが、考えてみれば自分も、有力者に慶事があれば、時を移さず祝品を運び込んでいたのだ。

——これからは恐らく、受け取る一方になるだろう。

御側御用人と言う役は、つい七年ほど前の天和元年十二月に始めて設けられたものである。その

三年後の貞享元年八月、大老堀田筑前守正俊が若年寄稻葉正体の為に、殿中で刺殺された。閣老（大老、老中）たちの居室は、それまで、將軍の居室と中一間を隔てたところにあったが、この事件以後、遠く離れた御用部屋に移されることになる。

そこで閣老たちと將軍との連絡をとる必要が生じ、御側御用人がその役目を勤めることになった。單に將軍の御側にあって取次ぎの役目をするに止まっていた御側御用人が、強大な権力を持つようになったのはこの時からである。

老中から將軍に何か言上しようとしても、御側御用人が取次ぎを拒絶すれば、どうしようもない。將軍の命令はすべて、御側御用人を通じて老中に伝えられる。

綱吉の最初の意図は、堀田の死を機会に、閣老の権力を抑え、独裁権を揮おうと言うことにあったのだが、実際上は有能な御側御用人が、閣老に代わって権威を専らにする結果になつてしまつていた。

現に、御側御用人牧野成貞は、老中以上の權威を持つてゐるのだ。やがて保明が、成貞に代わる日がこないと誰が言えよう。

「殿さま、お目出度うございます。到頭、お大名になられました。実家の父も、さぞかし、鼻が高いことでございますう」

着換えが済むと、妻室の定子が、改めて両手をついて祝辞を述べた。

定子の父曾<sup>や</sup>雌<sup>し</sup>甚<sup>し</sup>左衛門盛定は、保明の父安忠の母方の血縁である。早くから保明の聰明<sup>めいめい</sup>さに目をつけ、

——ゆくゆく、必ず出世する男だ。

と、保明十九歳の時、自分の方から安忠に申し入れて十六歳の定子を嫁がせた。その目がねに間違いがなかった訳だ。

「ひとえに、上様の御恩寵のお蔭じゃ」

保明は、極めて型にはまった答えをした。妻との対話はいつもこの調子なのである。

——大名になったことよりも、御側御用人にな

ったことの方が、遙かに重要なのだ。

と思つてゐるのは勿論なのだが、定子に対しては、そこまでは言わない。

「上様が、將軍家をお嗣<sup>つぎ</sup>ぎ遊ばしたことが、殿にとつても、何よりの仕合せでございました」

「そうだな、上様が館林<sup>たばやし</sup>宰相のままでおわしら、わしも一生、陪臣で終わるところだった」

せいぜいのところ、館林家の家老が出世の行止まりであつたろう。

だが、今は、無限の榮光に照らされた出世街道が将来に向かつて展<sup>ひら</sup>けてゐる。

「知足院（護持院）改修のお手柄を賞されてのことでございましょうか、それとも五の丸殿の御住宅造営のお手柄でございましょうか」

どちらも、確かに保明が特命を受けて奉行したことは確かである。本来、小納戸役の任務ではないが、綱吉はそんなことは顧慮しない。保明の才器を高く買つてゐるから、どんな仕事でも命じるのだ。

——そんなことはない。自分と上様とのつながりはもっともっと深いのだ。

保明は心の中で即座に否定したが、言葉は全く別のことを言っていた。

「そうだ、そうだろうな」

「いずれ、お邸替えがございましょう」

定子の声は弾んでいた。

一万石でも大名ともなれば、あらゆる待遇規定が替わってくる。知行所は領地となり、邸は藩邸となり、二百名前後の人員を食わせねばならなくなる。邸宅も、これまでとは比較にならぬ広大なものが必要となるし、新しく家臣も召し抱えなければならぬ。

「恐らく、近々に、お邸を賜わることになるう」

定子との型にはまった対話は、すぐに中断された。次々に、祝賀の客が到来したからである。使者は別として、親しい本人がやってきたのは、会わねばならない。

夜もかなり遅くなって、客がすべて辞去し去っ

た。

——今宵は、誰を。

保明は、考えた。

このところ、妻定子のほか、側室の染子、柳子の三人の中の誰かが、その日の気分次第で、聞に呼ばれた。

——染子にしよう。

と決めたのは、今の昂揚した気持を、最も直接にぶつけられるのは、染子のほかないと感じたからであった。

染子に接する場合には、定子に対する場合とは全く別のくつろぎがあり、どこやら艶めかしい気配が、自然にかもし出される。

現に、染子が保明の児を生んでいると言うことだけが原因なのではない。染子がかつて綱吉の寵を受けた女人である。保明自身も、かつて、綱吉の閨房に侍って、寵愛を受けている。保明は、今でも、染子を通じて綱吉とつながり、綱吉を通じて染子とつながっているような気がするが、あ

る。

綱吉の方でも、ややそれに近い感情を持っているのかも知れない。確かに一回り年長の將軍綱吉の、保明に対する態度には、ただ仲の良い君臣と言う以上の、微妙な甘えを許容するような、艶めいたものがあつた。

「本当によろしゅうござりましたなあ」

染子が言った。

床の中で、足をからませ、顔をすりよせてである。この女が少し甘ったれた声を出す時は、受け口の唇が妙に色っぽく濡れている。

「上様とは、ずいぶん長い間柄だからな」

そんな気軽な言葉が出た。

「上様はまだ、殿さまに、お氣があるのではございませぬか」

「ばかな」

保明は苦笑した。

「もう、遠い昔のことだ、それは」

「上様とのこと、詳しいことをお話しなさいま

せ。まだ、一度もはっきりしたことは承ったことがございませぬ」

「妙なことを改まって聞くではない」

「いいえ、承ります。私が上様の御寵愛を受けました次第については、ずいぶんとしつこくお問ひ質しになり、私も、恥ずかしいことを、悉皆申し上げたではございませぬか」

「仕様のないやつじゃな」

保明は、視線を天井に向けた。

「よし、話して聞かせよう。わしが上様に始めてお目通りしたのは、寛文五年十二月十八日、満七歳の誕生日だったな。父上に伴われて、四谷門外堀の誕生日だったな。神田のお館に参上した。当時、端横町の屋敷から、神田のお館に参上した。当時、上様は満十九歳、三位中将右馬頭であられた。何故かひどくわしがお氣に入ったらしい。御自からわしの手をとって、まだ木の香りの高い新築の御殿の中を、あちこちと連れ歩いて下された。父上がこの新御殿造営の奉行であつたからかも知れぬ。寛文九年十一月、満十二歳の時、御殿に召し出され